

石神遺跡B期整地土・ SD640出土の土器群

—石神遺跡第3～5次・第10～12次

1 はじめに

現在、考古第二研究室では石神遺跡出土土器の整理を集中的に進めており、これまで未整理であつたいくつかの土器群について、その内容があきらかになりつつある。B期整地土（取り上げ名「含炭褐色土」）は天武朝の大規模な改修にともなう盛土と理解されており、A期遺構群を覆うこの土層からは膨大な土器が出土している。また、C期の南北溝SD640は石神遺跡の中心部を南から北へと貫く大溝で、数次にわたる発掘調査で多量の土器が出土している。整理作業の進展にともない、B期整地土およびSD640から出土した土器群の全体像がほぼあきらかとなってきており、質・量においてともに飛鳥IVの良好な資料となるのは確実である。また、図178に示すようにB期整地土が古く、SD640のほうが新しいことが遺構変遷の上であきらかで、土器群の間でも様相差が認められる。

そこで、本稿ではこれら2つの土器群の重要性に鑑み、土師器・須恵器食器を対象として全体像を適切に要約し、現時点での中間報告をおこないたい。

2 遺構

B期整地土は炭・焼土・黄色粘土塊を含む褐色粘質土（第5次調査）で、その分布範囲は水落遺跡に近い第10次から第12次調査区の全域と、第5次調査区の西半である（図177）。石神遺跡付近の旧地形は、西側を流れる飛鳥川に向け西下がりとなっているため、盛土による嵩上げで平坦地を造成したものとみられる。第5次調査区では、B期整地土の東端はSD640のすぐ西側にあり、SD640より東側では地山上面が遺構検出面となっていたようである。第5次調査区の南側に位置する第4次調査区では、「含炭褐色土」との取り上げ名はほとんど用いていないが、土層図の対比からはB期整地土が分布していたのは確実である。また、井戸SE800の石組などのA期遺構はB期整地土で埋め立てられた可能性が高い。このため、B期整地土出土の土器群には、第4次調査出土の土器を一部に含めている。

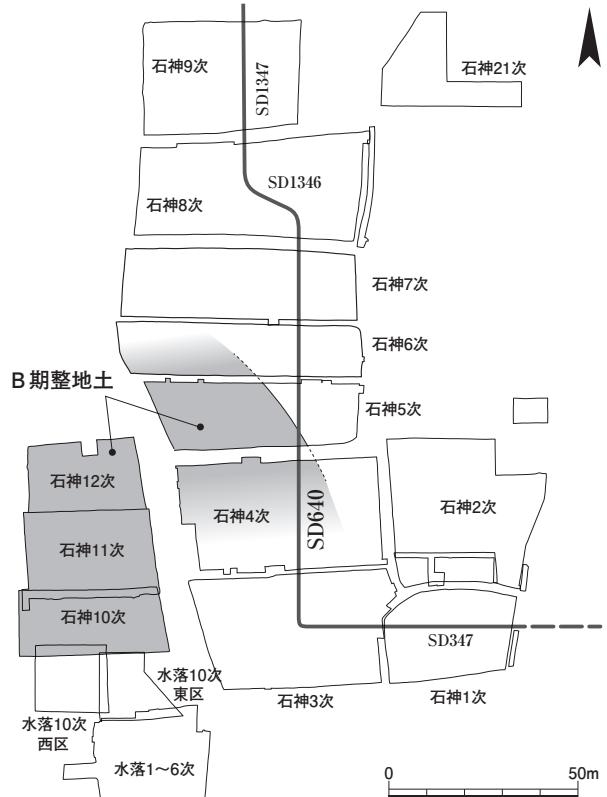


図177 B期整地土の分布とSD640の経路 1:2000

SD640は石神遺跡の南辺付近を西へと流れる東西溝SD347が北へと曲がり、そのまま南北大溝となったもので、B期整地土より新しい。第3次調査区から第8次調査区まで、検出した総長はおよそ110mにわたり、それより北側は曲折してSD1347となる。溝の幅は約2.5～2.7m、深度は約0.4～0.5mである。SD640からは木簡は出土していないが、SD1347Aからは辛巳年（天武天皇10年、681）前後に集中する木簡群が多数出土している（石神遺跡第15次調査、『紀要2003』）。『紀要2016』で触れたように、飛鳥から藤原宮への遷都時に廃絶した大溝であろう（尾野ほか「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要2016』、以下『紀要2016』とする。）。

3 B期整地土出土土器

第5次および第10次から第12次調査で出土したB期整地土の土器は木箱にして317箱にのぼる。土師器食器には杯A、杯B、杯C、椀B、杯G、杯H、皿A、皿B、鉢A、鉢H、盤、高杯があり、須恵器食器には杯A、杯B、杯G、椀A、椀B、皿A、皿B、高杯などがある。接合作業を経て2分の1以上に復元できる土器が多く、整地

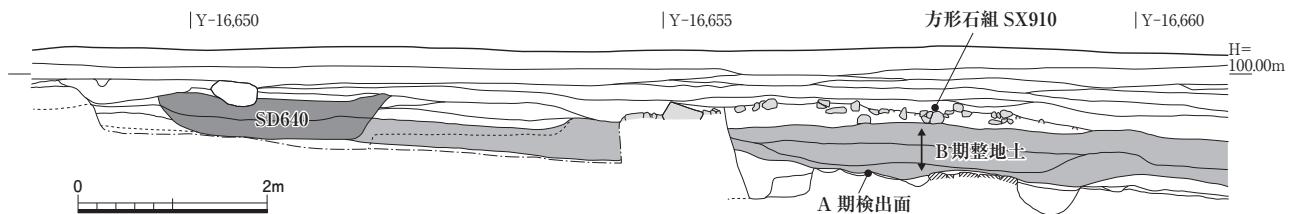


図178 B期整地土とSD640との層位的関係（第5次調査区南壁） 1:80

に際して一括して投棄されたとみられる。以下、土師器食器・須恵器食器のうち、計量上の誤差が比較的小さいと考えられる個体（口縁部の残存度がおよそ4分の1以上のもの）を選び、B期整地土出土土器の代表例として報告したい。

土師器食器（図179） 1～9は杯A。口径11cm前後のものもあるが、大部分は口径17.0～18.5cmである。口縁端部が丸みを帯びつつ内側に巻き込むタイプが多い。その一方で、半球形の底部から口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部が外方へとひらく個体もある（3）。底部を不調整にとどめるものと、ヘラケズリで調整するものとがあり、後者は口縁部外面にヘラミガキを施した例が多い。2・4・5・8は底部外面に木葉痕を残す。口縁部内面の暗文は二段放射暗文が多いが、粗い一段放射暗文を施したものも2個体ある。また、2は上段の暗文帯に連弧暗文を上書きしており、4は内面に線刻がある。

10は杯B。高台の小破片がほかにも散見されるものの、図示できるものはこの個体のみである。杯Aに比し口径が小さいが二段放射暗文を書き入れ、外面にはヘラミガキを施す。11は土師器椀B。その口径に比し器高が著しく大きく、土師器食器としてはきわめて珍しい。口径は15.0cmで、器高は8.8cmである。真っ直ぐに立ち上がる口縁部の内面には一段放射暗文を施しており、外面にはヘラミガキの光沢がわずかに残る。

12～34は杯C。口径の大小から大型品（24～34；口径14.5～16.5cm）、中型品（16～23；12.5～14.0cm）、小型品（12～15；10.0～12.0cm）とに分かれているが、もっとも多いのは大型品で、中型品がこれに次ぎ、小型品の占める割合がもっとも小さい。大型品は口径15.0cmに集中している。暗文を確認できるものは例外なく一段放射暗文である。外面は底部を不調整にとどめるものが圧倒的に多い。底部をヘラケズリで調整し、不徹底ながらヘラミガキを施した個体（29）もあるが、器壁が厚く暗文も粗い。なお、これら土師器杯Cの径高指数は26.0前後に集中し、

平均値は25.0である。

35～43は杯G。胎土・色調が杯Aや杯Cとは異なる。口径は11.0～14.0cmで、内面に暗文を施さない。35は底部外面に木葉痕をとどめ、36・39・41には粘土紐巻上痕が残る。また、36および41の内面には板状工具の痕跡が残る。

44は杯H。口径は13.5cmである。口縁部の小片が散見されるものの、略完形に復せたのはこの1例のみである。

45～48は皿A。口縁部の小破片や底部の大破片は少なうないが、およそ4分の1以上に復する個体は現在のところ7点にすぎない。食器構成のなかで皿類が占めている割合は、この見かけ以上に大きいであろう。復元口径は22.0～26.0cmにおさまり、口縁部内面に一段放射暗文を施している。なお、高台付の皿Bも少数ながら確認している。

49は鉢A。内弯する口縁部の内面に二段放射暗文を施し、外面にヘラミガキを施す。50・51は土師器鉢H。砂粒を含む胎土で軟質に焼き上がる。口縁部の上部をヨコナデで整えるが、これより下位はヘラケズリのままである。口径が19.0cmのもの（50）と23.0cmのもの（51）とがあり、後者はほぼ完形に復せる。

須恵器食器（図180） B期整地土からは杯Hとその蓋が少量出土している。杯H（53）は完形品で、外端径は10.7cmである。底部外面にはヘラ切り痕が残る。杯H蓋（52）は口径9.8cmで、53に見合う大きさである。頂部はロクロケズリで調整する。

杯蓋には口縁端部付近に「かえり」を付したものとこれをもたないものとがあり、前者が圧倒的に多い（約70%、110点）。かえりをもたない杯蓋は約30%（51点）である。これは口径13.5cm以下の杯蓋がほぼかえり付で占められるためで、高台をもたない小型の杯（杯Gおよび杯Aの一部）に対応するとみられる。一方、かえりをもたない杯蓋は口径13.0～14.0cmと16.0cm前後に多いが、後



図179 B期整地土出土土師器 1:4

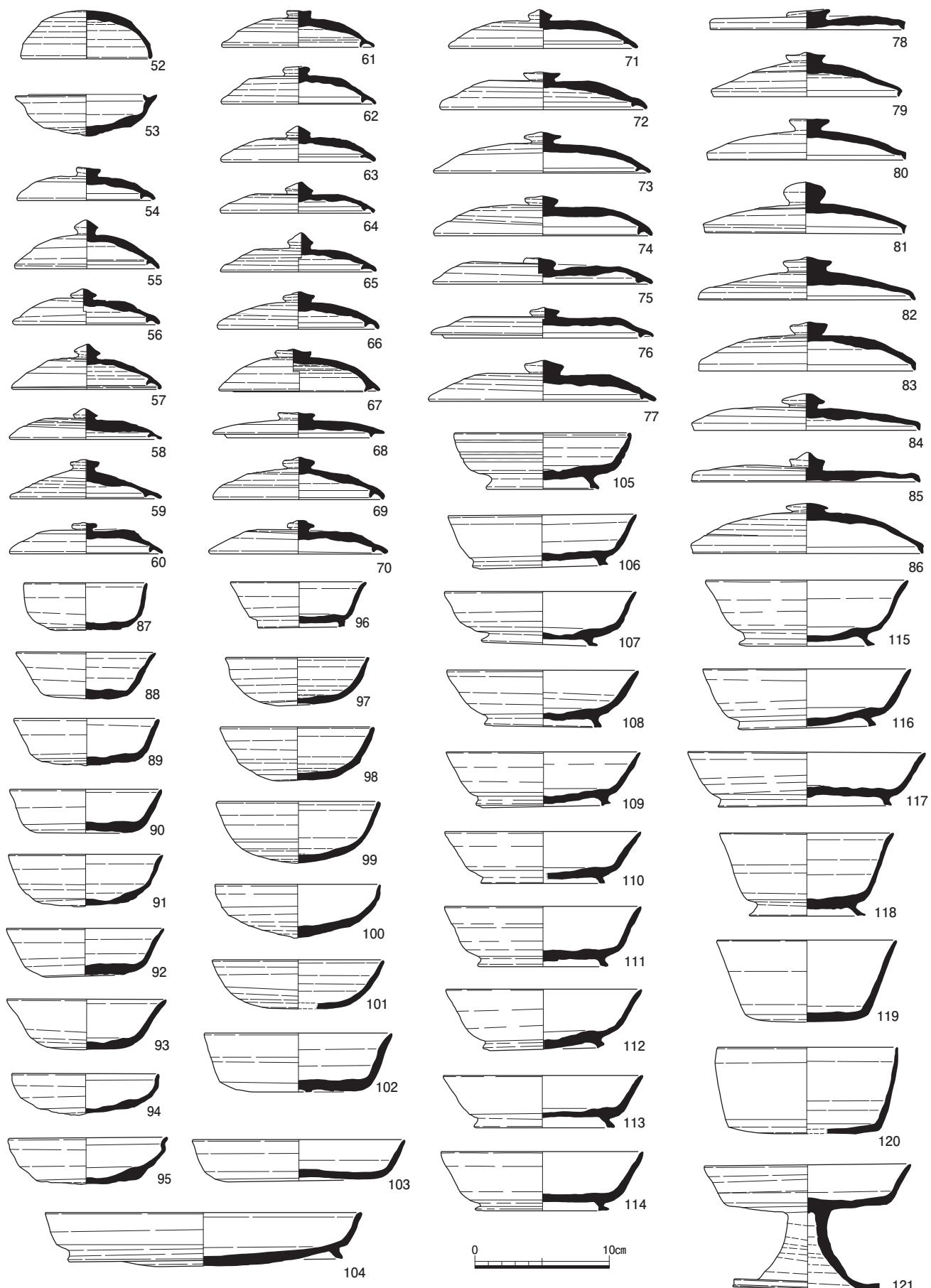


図180 B期整地土出土須恵器 1:4

者でもかえり付のほうが多い。

54~70はかえり付の蓋で、口径10.0~13.5cmのもの。その受部径は9.5~12.0cm程度となり、ほぼ同じ口径の杯身(87~101)に対応すると考えられる。57は備前産の可能性があり、67は湖西産とみられる。71~77もかえり付の蓋で、口径14.0~17.0cmのもの。受部径は12.5~16.0cmとなり、多くが杯Bの蓋にあたる。78~86はかえりをもたない杯蓋で、口径は13.0~18.0cmである。このうち、口径14.0~15.0cmの一群(78~81)は、その受部径から椀類(118~120)の蓋にあたり、口径16.0cm以上の82~86は杯Bの蓋であろう。

87~95・97~103は高台をもたない杯。口径9.0~12.0cmで底部外面をヘラ切りのままとするもの(87~95)は杯Gと杯Aとの区別が困難であるが、前述のように受部径が9.5~12.0cm程度の蓋と一具をなす。これらより口径が大きい一群(97~103)をさしあたり杯Aとする。杯Aには底部外面をロクロケズリで調整した一群が含まれ、97~99は湖西産、101は尾張産とみられる。103は口径15.9cmで浅手の杯A。

96および105~117は杯B。96は口径10.0cmの小型品で、B期整地土出土土器のなかではきわめて稀である。もっとも多いのが口径13.0~16.0cmの一群(105~116)で、須恵器食器のなかで主体をなしており、ほかに口径が17.0cmを上回るもの(117)が少数ある。主体となる一群では高台の内側(底部外面)にヘラ切り痕をとどめる個体が半数以上を占め、かえり付の杯蓋と一具をなすものが多いと考えられる。それらの高台径は8.5~11.0cmで、口径のおよそ3分の2にあたる。

椀A(119・120)と椀B(118)は、須恵器食器のなかではごく一部を占めるにすぎないが、確実に食器構成の一員となっている。椀Aは口径が13.5cmに集中し、器高は4.8~6.5cmである。これらに対応する大きさを備えた蓋(口径14.5cm前後)で胎土や色調が近似するものはかえりをもたない。箱形を呈する120は尾張産であろう。

皿B(104)は一例を示す。口径24.0cmで、底部をロクロケズリで整える。ほかに高台をもたない皿Aがあるが、須恵器の食器構成のなかで占めている見かけの割合は小さい。

121は高杯。杯部の口径は15.4cmで、ロクロ整形した脚部を貼り付ける。

(森川 実)

4 SD640出土土器

第3次調査から第8次調査で出土した土器は整理用木箱で209箱である。以下、整理作業と図化がほぼ完了した第3次から第5次調査出土の土器について述べる。土師器には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、高杯C、高杯G、高杯H、皿A、皿B、皿H、鉢A、鉢B、大型鉢、盤、鉢H、壺A、甕、甌など、須恵器には、無高台杯、杯A、杯B、杯蓋、椀A、椀B、椀C、鉢A、鉢F、高杯、皿A、皿B、皿B蓋、盤、各種壺・甕類などが出土した。SD640出土須恵器については以前、尾張産および湖西窯産のものを報告し、食器類の法量分布についても検討しており、その成果を公表している(『紀要2016』・尾野ほか「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」『紀要2017』、以下『紀要2017』とする。)。

土師器食器(図181) 1・2・24~36は杯A。口径は小さいほうから11.0cm(1・2)、16.0~18.0cm(24~31)、18.0~21.0cm(32~36)とに分かれている。箱形の特殊な器形で口縁端部を丸くおさめる36を除き、口縁端部を巻き込む。底部外面をケズリ調整するもの(24・25・28~36)と不調整のもの(1・2・26・27)がある。多くは口縁部外面にミガキを施すが、小型の1・2には確認できない。内面には二段放射暗文を施し、その間に連弧暗文を施すものもある(26・31・36)。23は杯B。22は杯B蓋。

3~21・37~45は杯C。口径は小さいほうから11.0~12.5cm(3~5)、12.5~15.5cm(6~21)、15.5~17.0cm(37~42)、18.0~19.5cm(43~45)とに分かれる。底部外面の調整は、口径15.5cmまでの中・小型品についてはケズリによるものはごくわずか(17・18)で、不調整のものがほとんど(3~16・19~21)だが、口径15.5cm以上の大型品には不調整のもの(37・41・42)とともに、ケズリ調整するもの(38~40・43~45)がなお多く確認できる。口縁部のミガキも、中・小型品には確認できないが、大型品には施すものがある(39・42・43・45)。口縁部内面には一段放射暗文を施し、遺存状態が良いものの底部内面には螺旋暗文が確認できる。

46~51は杯G。口縁部が直線的に立ち上がるもの(46~48)と、外反して立ち上がり底部との境ににぶい稜線をなすもの(49~51)がある。いずれも口径は12.0~13.0cm前後。52~54は杯H。口径12.0~13.0cm前後のもの(52・

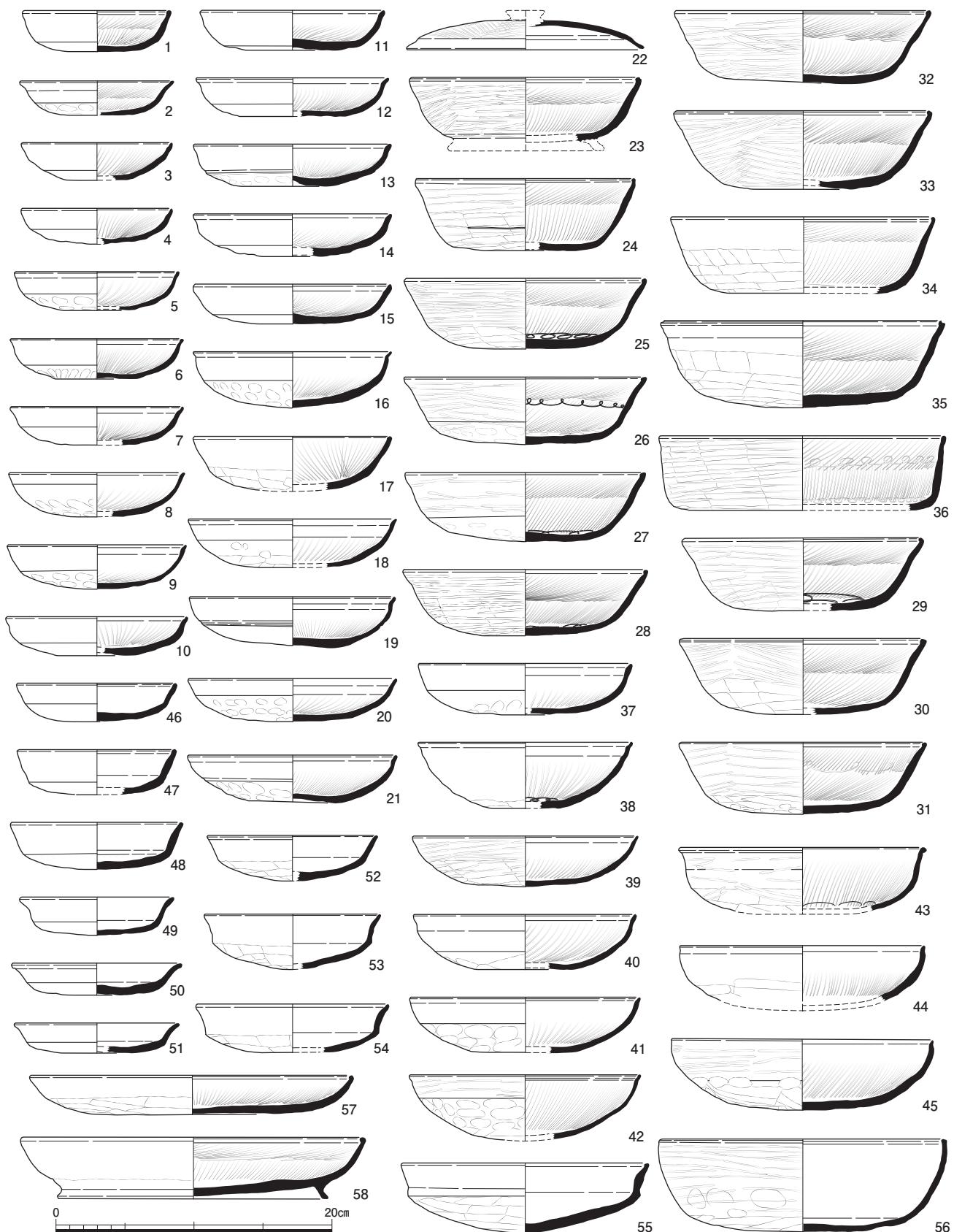


図181 SD640出土土師器 1:4

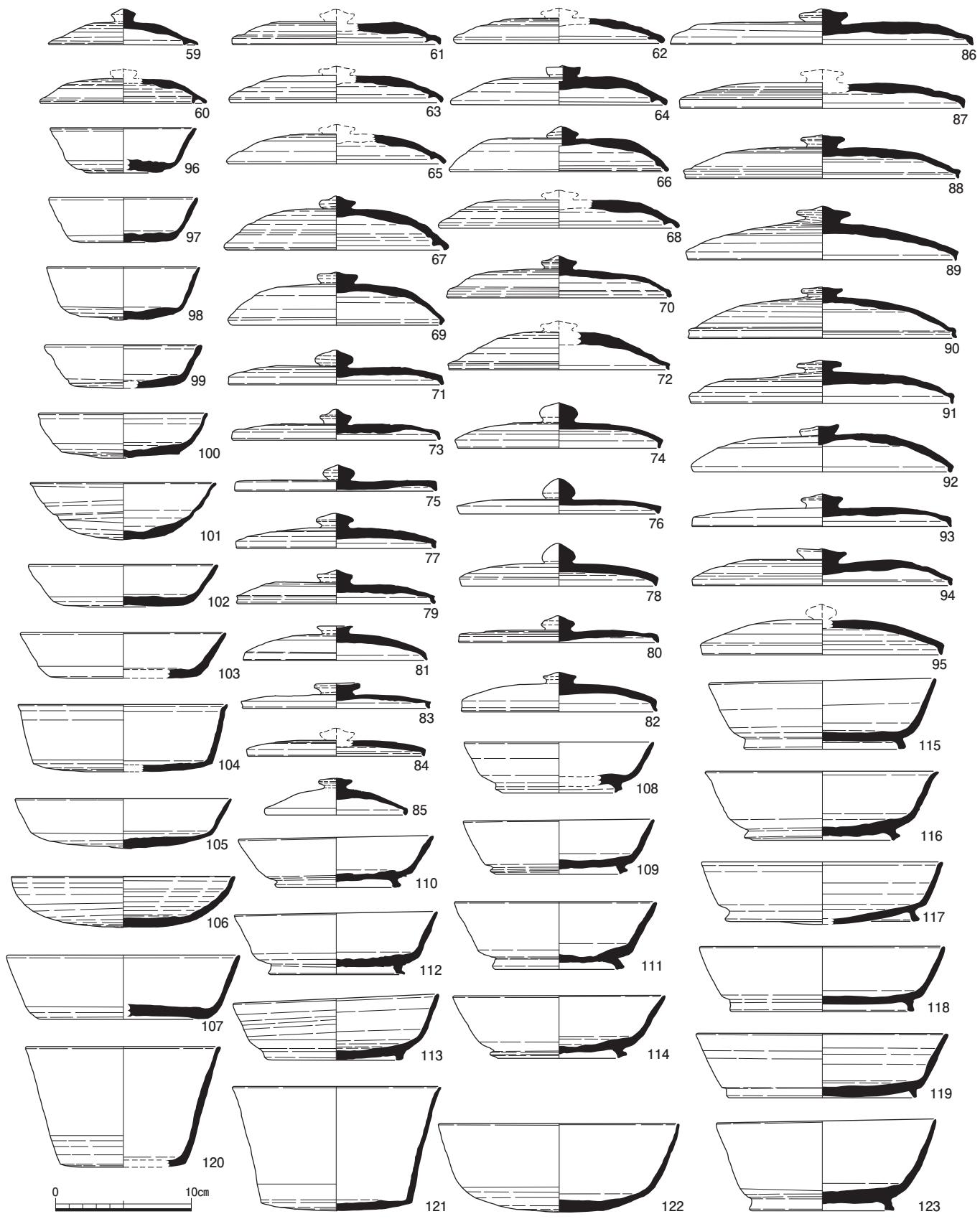


図182 SD640出土須恵器 1:4

53)と14.0cm前後のもの(54)がある。56は鉢A。55は鉢H。57は皿A。今回示したものは底部外面をケズリにより調整するが、不調整のものも多い。口縁部内面に一段放射暗文を施す。58は皿B。口縁端内面には二段放射暗文を施す。

須恵器食器(図182) 59~95は杯蓋。59~68がかえり付、69~95がかえりをもたないもので、その比率は概ね1:3で後者が多い。かえり付の杯蓋には、外端径が10.5~12.5cm(59・60)、14.5~16.0cm(61~67)と、17.5~18.0cmのもの(68)がある。外端径が14.5cm以上のものは杯Bに対応するが、10.5~12.5cmの蓋は受部径が10.0~11.0cmで、口径10.5~11.0cmの無高台杯と対応するとみられる。かえりをもたない杯蓋は、外端径が10.5~11.0cm(85)、13.0~15.0cm(77~84)、15.0~17.0cm(69~76)、18.0~21.0cm(86~95)の4種からなる。大部分は杯Bに対応するが、外端径が10.5~11.0cmのもの(85)や13.0~15.0cmのなかで尾張産のもの(77・78・82~84)の一部は、尾張産の椀Aに対応するとみられる(『紀要2016』)。

96~107は高台をもたない杯。口径は10.5~12.5cm(96~100)、13.5~14.0cm(101・102)、14.5~16.0cm(103~105)、16.5~17.0cm(106・107)に分かれる。底部外面の調整は、口径12.5cmまでの小型品ではヘラ切り不調整(96~100)が主体となり、ロクロケズリによるものは少ない。一方、口径13.5cm以上のものはロクロケズリによるもの(101~107)が主体となり、ヘラ切り不調整のものは多くない。

108~119は杯B。口径は13.5~16.5cm(108~114)、16.5~18.5cm(115~118)、20.0cm以上(119)の3種がある。底部外面の調整は、ロクロケズリによるもの(110・113・115~119)とヘラ切り不調整のもの(109・111・112・114)がある。

120~122は椀A。口径は10.5~11.5cm、13.0~15.0cm(120・121)、17.5~18.0cm(122)がある。121は椀B。

須恵器のうち、73・74・76~78・82~85・89・91・93・95・115・117・119・120~122は尾張産と確実視されるもので、その可能性が高いものには75・80・102~104・106・107・123がある。また、湖西産と確実視されるものに113がある。須恵器全体の中で、尾張産はほぼ確実なものだけで約23%、そうである確率が高いものを含めると約38%を、湖西産は約4%を占めることになる(『紀要2016』、『紀要2017』)。

(大澤正吾)

5 まとめ

B期整地土とSD640出土の土器群は、土師器杯Cの法量や須恵器の杯蓋にかえりをもつものともたないものが定量ずつ共伴することから、ともに飛鳥IVに位置づけられる。しかし、両者を比較すると、いくつかの点で土器様相の違いが認められる。この差は、遺構の新旧関係からみて基本的には、B期整地土出土品がSD640出土品より古いという「時期差」を反映したものと解される。

具体的には、土師器杯Cでは口径分布が大きく異なっており、全体にSD640出土土器のほうが大きい。B期整地土出土土器の大型品は14.5~16.5cmであるが、SD640では18.0~19.5cmのものが現れる。つまり前者の大型品は、後者の中型品(15.5~17.0cm)にはほぼ匹敵する。小型品の口径も、SD640のほうが大きい。径高指数はB期整地土で25.0、SD640で23.4(ともに平均値)となり、後者のほうがやや浅手となる。

須恵器食器では、「かえり」を有する杯蓋の比率が双方で大きく異なり、B期整地土の杯蓋では70%がかえり付であるのに対し、SD640のほうでは約25%を占めるにすぎない。これはB期整地土のほうで、口径13.5cm以下の杯蓋がほぼかえり付で占められることを直接反映したものである。B期整地土では無高台で小口径の杯(口径12.0cm未満)が一定量出土しており、それらの多くがかえり付の蓋をもつ有蓋食器であったことを示す。一方、SD640では小口径の無高台杯が大きくその割合を減じており、結果的に蓋のなかでかえりをもたないものの占める割合が高くなっていると推測できる。このほか、杯BはB期整地土からSD640にかけて口径がやや大きくなる反面で径高指数が少し低減し、代わりに高台が外寄りに付される傾向が強まることを統計的に把握している。

ただし、こうした計量的検討により導かれた双方の土器群の「時期差」が直ちに飛鳥IVの細分を意味するものではないことを強調しておきたい。両土器群の様相差を生じる要因には、単純な時間差のみにとどまらず遺構の性格差も考慮を入れる必要があるからである。飛鳥淨御原宮期において遺跡の性格差によって土器群にも様相差を見出せることはかねてから指摘しており(『紀要2016』)、両土器群にみる様相差の評価については別の機会を得て詳しく述べたいと思う。

(森川・大澤)